

実習のお礼

今治明德短期大学

生活科学科生活福祉専攻 渡部 文

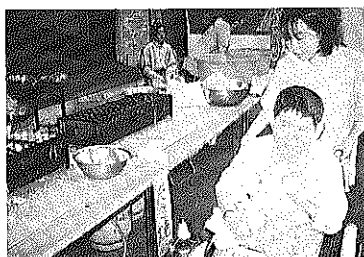


三恵ホームのみなさん、お元気ですか？
三週間実習をさせていただきお世話になりました。三恵ホームでの実習を通して、たくさんのことを学ぶことができました。

実習が始まる前は、緊張と不安でいっぱいでした。そんな時に先生が、「受け身の状態で実習へ行っても利用者の方に迷惑になるだけだから、肩の力を抜いて誠心誠意で頑張りなさい。」と話してくれて、少し自分の気持ちが楽になり、「自分なりに楽しんで実習させてもらおう。」と思い実習に臨みました。

私の朝は、各部屋の挨拶回りから始まりました。利用者の方に挨拶をしていたことでとても気持ちよく毎日実習に臨むことができたと思います。実習の中で、利用者の方に、「自分も口腔ケアをしてもらってみて。」と言われ、実習生の石手さんとお互いに体験してみました。その時、利用者の気持ちがよくわかりました。相手の立場に立って考えることがとても大切だと思いました。又、介護は見学するだけでなく、実際自分が介護して体で感じることも大切だと思いました。今年も一緒に盆踊りに参加し楽しい思い出もできました。

今回の実習で学んだことを、今後生かせるよう勉強し、信頼される介護福祉士になりたいです。ありがとうございました。



本当に維持なのだろうか？

理学療法士 水田 秋 敏

私が当施設に転動してきた約9年前は、療護施設の常勤PTは全国的にもほとんどいなかった。

そのころ、運動機能を向上させるための下肢装具や補装具の申請の事前連絡を役所へすると、「なぜ療護施設の利用者に新規の医療装具が必要なのか？」という趣旨のことをよく言われた。療護施設の本来の定義からいっても仕方ないとも言えたが、確かにそれらによって機能向上する人は少なからずいた。

それには、2つの理由があると思われる。

ひとつは、潜在能力がある若い人の場合である。もうひとつは、医学的見地からの治療がほとんどなされないまま療護施設に入った人の場合である。

だから直接処遇する職員は、常に今の状態が最良なのかよく考え、可能なことは自ら実行するし、そうではないことは関係職種へ連絡する義務があると思う。

「本当に維持なのだろうか？」

このことは下手な勉強より大切な言葉である。(了)

